



夢みるスケール

スケール・寸法・サイズの博物誌

彦坂 裕

彰国社

100M

はじめに

寸法やサイズはごく日常的な概念である。誰でも身長やスリーサイズ、クルマやお気に入りの道具などのスペック、歩行や走行距離などに無関心ではないし、それを数字として知っていれば、いろいろな場面で有益になることも多い。また、ID やインテリアデザイン、舞台・展示・映像の演出、建築・造園・都市・土木の設計や環境開発などに職業的関わりをもつ人にとっては、寸法やサイズ、さらにそれを基盤とするスケール感などに対する知見は、ある意味必須のものでもあろう。

そればかりではない。旅のガイドにはこの大聖堂がどのくらいの高さで、この橋の長さはいくつ、どこそこの広場までは中央駅から何メートルある、といった案内が溢れ、新しい施設や場所が生まれれば、マスメディアはその規模などのスペックを必ず報道する。それが日本一とか世界一とかなればなおさらだ。

2010年に上海で万国博覧会があった。いささか個人的な体験をいえば、私はその日本館製作にたずさわっていたが、いろいろな機会にさまざまな人たちを相手に日本館の建物をプレゼンテーションしなければならなかった。そのとき、最初に必ずこう言った覚えがある。「長手が100m、短手が50m、高さが24m、突起のような3本のタワーが27m くらいのドーム型膜建築です」。

これで寸法がどのくらいか、数字としてはそのようなものか、ということを手は理解する。これでわかる人もいるが、さらに「長手は新幹線4両分、短手は2両分、高さは1両よりやや短い」、あるいは「ポンピドゥーセンターの幅はそのままに長さを2/3、高さを半分近く縮めたくらい」、または「クイーンエリザベス号の1/3の長さ」「パリの凱旋門とほぼ同じ幅」などを付け加えると、大多数の人はそのスケール感を掴み始める。比較しているのだから、基本にお互い知っているものでないとわけがわからなくなる。だから、プレゼン相手によって比較事例は変える。そしてそこから具体的な内容の説明に入る。

建物の場合にはとくにまずサイズ、そしてそれがもつスケール感を語らないと

わかりにくいし、それは重要なことだと私は考える。模型や透視図ではスケール感は伝わらない。具体的な寸法と他事例との比較が、そんな場面では有効だ。伝える相手が素人の場合にはますますそうである。そのためには比較事例をどれだけ情報として、そして体験としてもっているか、ということに命運がかかる。これはプレゼンだけではなく、実際の計画や設計においても当てはまることだろう。同じ寸法がもつ共通の特質や、同サイズでもスケール感が異なって感じる理由、その場所においてこのスケールがもつ意味、そして寸法によって立つ合理的な背景といったものも必然的に考えるからだ。

しかしそのようなことを別にしても、世の中にある物品、生き物、乗り物、芸術作品、建物などの寸法、広場の大きさ、塔の高さ、道の長さ、移動距離、世界遺産の規模などを知ることは、それ自体で大変面白いし発見もある。世界の七不思議の建造物のサイズは一体どの程度だったのか、映画や小説に登場する乗り物や建物は、実際にはどれくらいの大きさなのだろうか、と果てしなく広がる。

こうした好奇心をベースに、ジャンルに関係なく同サイズのものを並べたらどうなるのか、現実では絶対に共存しないものが隣接して同じ場所にあったらスケールのどんな情景になるのか、といった想像力上の快樂にはまることもできる。そして、それを画布上で試行していると、そこにまた新たな別の発見がある。ソリッドでもヴォイドでも、実体のあるものはすべて寸法、サイズをもつ。ここでは、宗教も文化もイデオロギーも関係がない。実体の比較対照や置かれる環境の変換によって、その実体が潜在的にもつ意味性を顕在化するさまざまな実験ができる。

かつてシュルレアリスムでは異化作用の実験として、側溝の中に彫像が登場したり、真昼の空の下に夜景の街が広がる情景が表現された。現実では見えない別の現実性や意味を発掘しようという欲求が充ちていた。それが本来置かれる文脈から切り離され、別の世界で新たな生が芽生え始める。

そんな志向性は、万物万象の見える化を欲する情熱とどこかで密やかに通じ合うものがある。数字として寸法をおさえる、サイズを比較・対照する、それらの未知の組み合わせを夢想する、そしてスケールの記憶劇場をつくる、ひたすらその角度からだけで万物万象を見ようと試みるプロジェクトだ。

本書はそのような趣旨から制作されている。

I編では、スケールに対する基本的な考え方を提示する。II編は、前述した実験を編んだものだが、一言でいえば、スケールをめぐる空想旅行である。項目ごとの場面内の図はすべて同じスケールで描かれている。

III編は主として都市や地域、そして大陸間規模で存在する見えにくいスケールに関するガイド、IV編はスケールの基盤となる寸法やサイズの一覧である。

実はスケールを考えるに当たって採り上げる事例というものは、いくらそれが周知されているものであったとしても、個人的な偏向は免れない。また当然のことながら、漏れなく採り上げようと思えばきりがなくなる。したがってここに登場する実体は、私の趣向と関心の結果でもあり、私以外の他者が同じ趣旨の本をつくったとしたら、全く別のものになっていくはずである。

しかし、全編を通し、スケールというものを考えるに当たっては有効な素材を厳選したつもりであり、また、現在失われたものやいくつかの未踏の地にある実体、軍用物、架空の事例、そして地球外に関するもの以外は、ほとんど私自身が実体験し、またなじんでいるものである、ということも記しておこう。企画プランナーやデザイナー、ものづくりにたずさわる方々のみならず、歴史や旅のマニア、リベラルアーツ愛好者、そして好奇心の強い一般の読者諸氏にも役立ってくれればと願う。

最後に、情報兵站において協力してくれたばかりか、このような動機や趣旨を常に理解し支えてくれた愛猫（測量対象にもなった！）を含む私の家族に、この場を借りて心より感謝したい。基礎資料整理の労をとってもらった事務所スタッフの平川由美子氏、そして本の現実化に尽力していただいた彰国社の富重隆昭氏、前田智成氏にも併せて謝意を表するものである。

2013年2月 彦坂 裕

はじめに 3

I スケール序論 9

スケールの孵化／スケールと寸法、サイズ／
抽象的な単位と身体的な単位／超大単位／2
つのモデル／スケールの錯覚／スケールのレト
リック／モジュール／ヒューマンスケール

II スケール千一夜 21

01 手の中のスケール 22
02 ナマコのピアニスト 23
03 身近な定規 24
04 趣味の生活 25
05 ロートレアモンのサイズ実験 26
06 変身の観察 27
07 思索するダチョウ 28
08 モデュロールをめぐる 29
09 旅立ちの受胎告知 30
10 ワニはいつも人を驚かせる 30

11 森の中のコング 32
12 ゴールを守る神々 33
13 覚醒するオフの渚 34
14 ピットには芳香が漂う 35
15 幼稚園の前での記念撮影 36
16 伝承モニュメントの廃園 37
17 風を切り裂く 38
18 建物と兵器が横並ぶ 39
19 10m 後半の標本箱 40
20 神殿を横切るヴィークルの群れ 42
21 スポーツ尺度の周回 43
22 キーサイズとしての 25m 44
23 課外授業 45
24 建築・芸術・軍事の射程距離 46
25 正倉院と救助隊 47
26 童話世界の門へ 48
27 架橋の喜び 49
28 ドームの中の神秘 50
29 魔性と畏怖が共存する 51
30 湖の楼閣と百尺寸法 52
31 シーラカンスオデッセイ 53
32 身体を超えた巨大スケールが誘うもの 54
33 神へ向かう 55
34 海の劇場 56
35 特異な作業現場 57
36 シャンゼリゼの見慣れぬ風景 58

37 ウルトラ神話のアリバイ 59
38 円環は宇宙とつながる近道か? 60
39 邂逅する灯台 61
40 浮遊世界 62
41 建築と都市のあいだ 64
42 芸術と技術は新しいスケールを
生み出す 65
43 文化交通の培養所 66
44 ジャンプ台の回りのランドマーク 67
45 抗広場恐怖症 68
46 野心的建築群にラドンが飛来 69
47 球体系列 70
48 単一機能空間の絨毯 71
49 ジグザグとその幻影 72
50 歴史に封印されたメガロマニア 73
51 過密の島々 74
52 見慣れた 330m の驚異 75
53 400m を讃える庭で 76
54 地形と競演する煙突 78
55 光と塔 79
56 セントラルパークは人工と自然の
スケールを仲介する 80
57 この巨大エリアで何が起こったのか? 82
58 歪な輪 83
59 月の象嵌 84
60 光跡の尾が通過する 85

III 見えないスケール 87

街区 88
街路・道路 [幅員] 89
街路・道路 [長さ] 90
航続距離 91
軌道系長さ 92
射程距離 93
主要 2 点間距離 94
都市比較 96

IV 寸法・サイズの 記憶リスト 101

著者略歴・出典 112

II スケール千一夜

The Thousand and One Nights by Scale

想像可能なるものはすべて、夢に見ることもまた可能でございますが、もっとも意外な夢とは、すなわち一箇の判じ絵——欲望を、さもなくばその裏返し、恐怖を隠しているものでございます。都市もまた夢と同様、欲望と恐怖で築かれております。たとえその話の糸が隠されており、またその規則が不条理で、その見透しが誤り易いものでありましても。そこではあらゆるものがそれぞれに何かしら他のものを隠しておるのでございます。

イタロ・カルヴィーノ『見えない都市』（米川良夫訳）

いきなりひらけた場所に出て、そこに高さ一二〇センチくらいの小さなおうちがありました。「だれが住んでるのか知らないけど」とアリスは思いました。「こんな大きさをちかよるわけにはいかないわね。だって死ぬほどこわがらせちゃうわ！」そこでまた右手のかけらをかじりはじめて、身長二五センチになるまで、けっしておうちには近づきませんでした。

ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』（山形浩生訳）

どこにいても寸法計測に役立つ日用品がある。その計測も精密なものではなく、寸法勘が掴めればよい。物品はすべて定規に転用できる。が、その資質は基本的に、全国あるいは世界中どこにいても流通している種類の物品が望ましい。通貨、スポーツゲーム用品、オーディオヴィジュアル系の規格製品、土木の要素素材といったものだ。

日本での格好の定規は千円札である。横15cm、縦7.5cmであり、これに直径2cmの円玉があれば、ほとんどの日常的な小さな計測は間に合ってしまう。USドル札は1\$から100\$まですべて同寸法で、15.6cm×6.8cm、しかしクレジットカード(8.5cm×5.4cm)や一般的な名刺(9.1cm×5.5cm)と似て数字も覚えにくく、寸法定規としてはやや使いにくい。

次はボール寸法で、パチンコ玉(1.1cmΦ)、ピンポン球(4cmΦ)、ゴルフボール(4.267cm = 1.68インチΦ)、テニスボール(6.5cmΦ)、野球ボール(7.32cmΦ)、ハンドボール(一般男子用で19cmΦ)、バレーボール(21cmΦ)、サッカーボール(22cmΦ)、バスケットボール(24cmΦ)、ビーチバレーボール(27cmΦ)、運動会

の大玉(1m50cmΦ)、ちなみに蹴鞠は16~20cmの直径である。

一方、ゴルフの穴は直径10cmで、これはトイレトーパーの直径(幅は11cm)や官製はがきの長辺長さに等しい。CDやDVDは直径12cm、LDや昔のLPレコードは直径30cm。30cmは2リットルのペットボトルの高さや旧式の波状表面をもつ楕円の湯たんぼの長さ、舗装によく使用されるコンクリート平板の1辺と同じであり、12cmは通常使用されているティッシュの箱の横幅(厚みはまちまち)と同じである。ちなみにCDの穴は1.5cmΦ、ペットボトルの蓋は3cmΦ、ヨーロッパの石畳などによく使われる御影石のピンコロ石は9cmの立方体である。

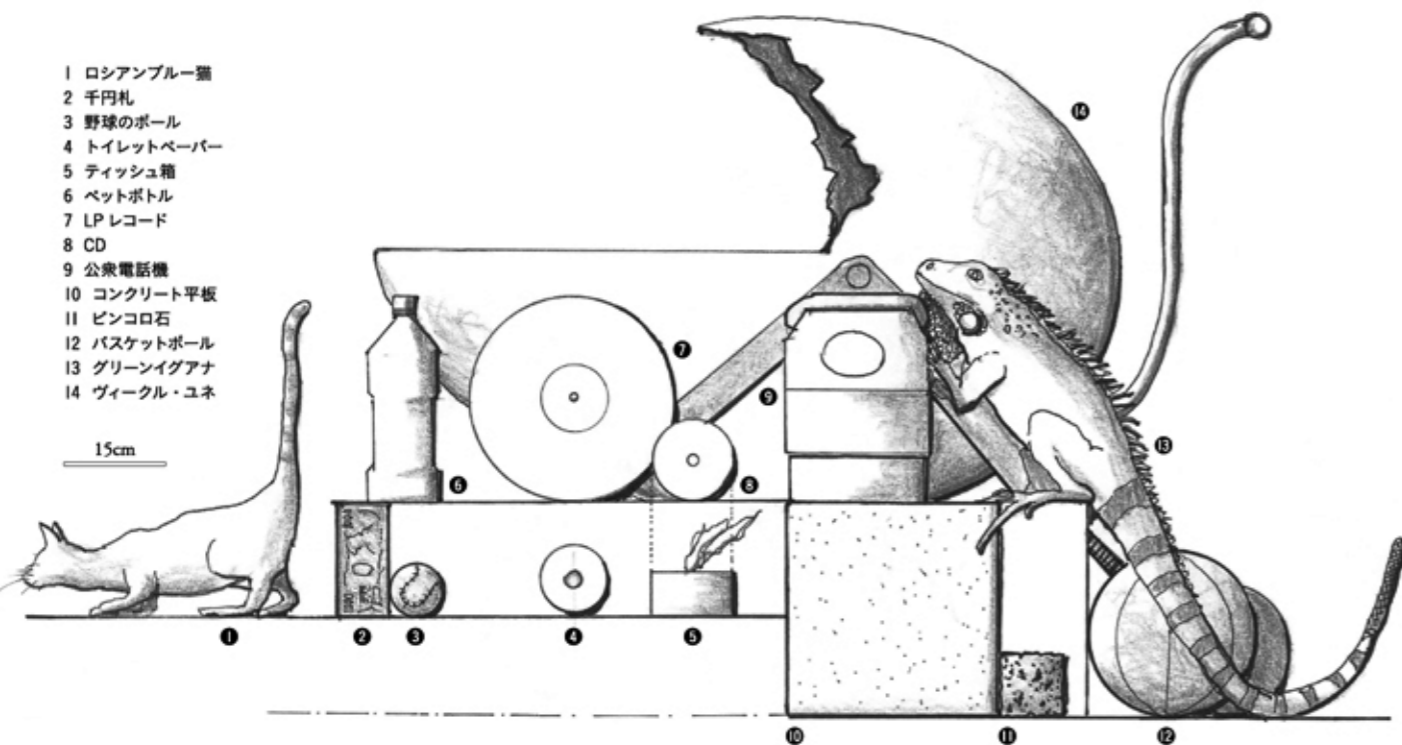
携行品としては、一般的なスマホの幅は6cm(旧来の携帯は約5.5cm—ZIPPOライターの高さも同じ)、コンパクトカメラの幅は機種や年式によって差があるものの幅がほぼ10cmだ。

もちろん、これらの身近な定規は属人的趣向によって差異をもつ。遍在性、可搬性、不易の定型サイズ、それに単純明快な数字的寸法であることがキーだ。

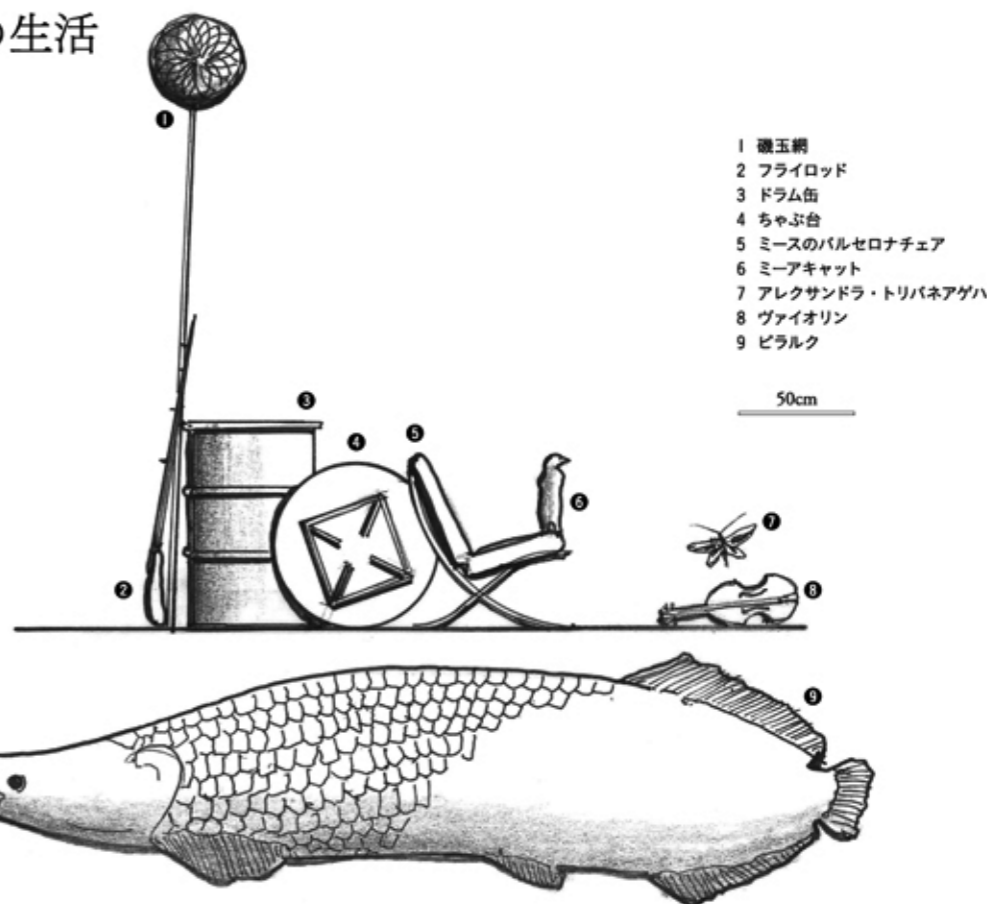
03 身近な定規 Intimate rules

- 1 ロシアンブルー猫
- 2 千円札
- 3 野球のボール
- 4 トイレトーパー
- 5 ティッシュ箱
- 6 ペットボトル
- 7 LPレコード
- 8 CD
- 9 公衆電話機
- 10 コンクリート平板
- 11 ピンコロ石
- 12 バスケットボール
- 13 グリーンイグアナ
- 14 ヴィークル・ユネ

15cm



04 趣味の生活 Life of interest



- 1 磯玉網
- 2 フライロッド
- 3 ドラム缶
- 4 ちゃぶ台
- 5 ミースのバルセロナチェア
- 6 ミーアキャット
- 7 アレクサンドラ・トリバネアゲハ
- 8 ヴァイオリン
- 9 ビラルク

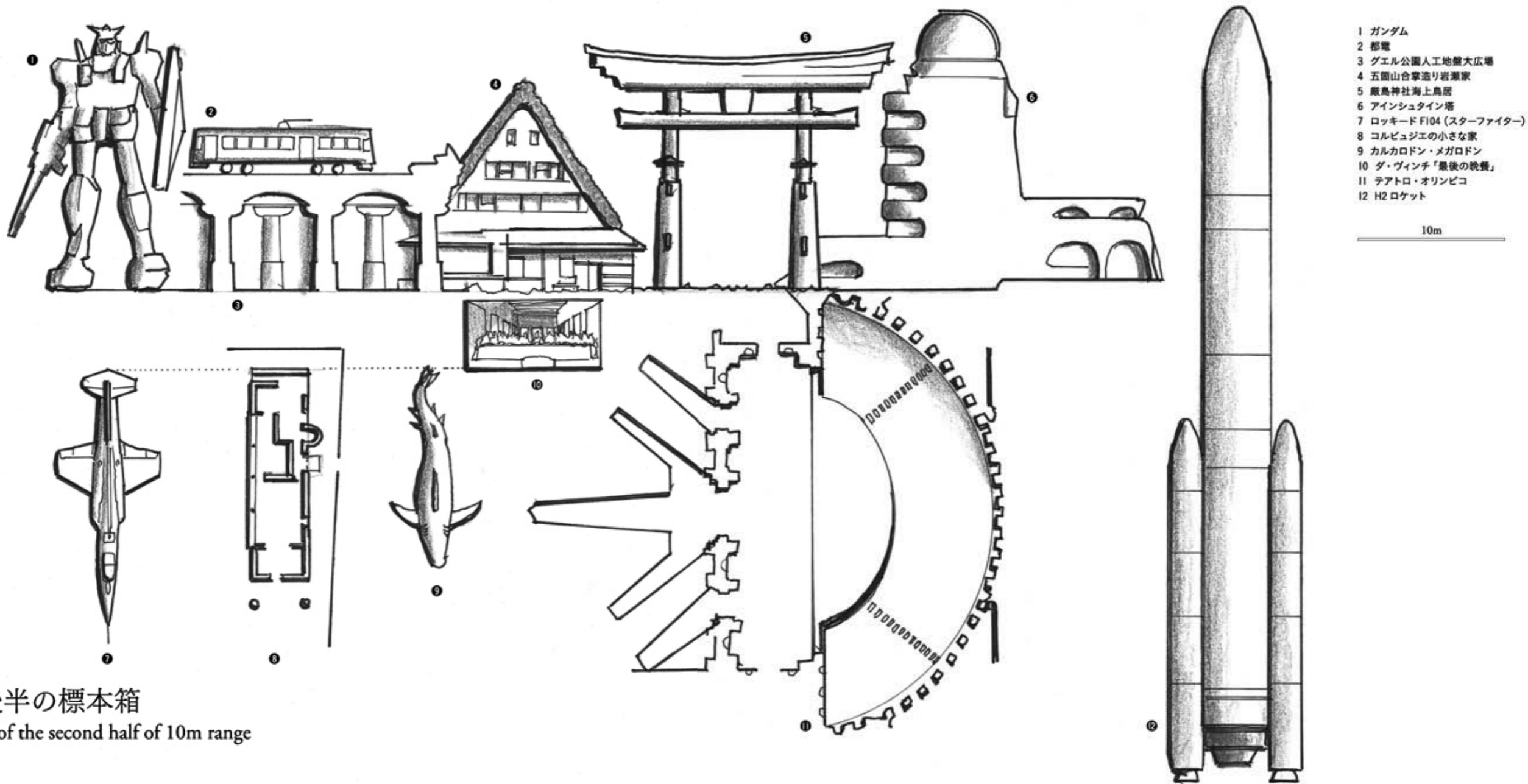
50cm

近代建築の巨匠ミース・ファン・デル・ローエは、建築だけではなく、素晴らしい椅子も設計した。「バルセロナチェア」というもので、同じくミースの手になる1929年バルセロナ博覧会のドイツ館「バルセロナパビリオン」の中で展示されたものだが、モダンデザインの白眉として現代でもそのファンは多い。寸法的にはその測り方によって偏差もあるようだが、おおよそ長さ76cm、幅76cm、高さ77cm(大雑把に75cmキューブとおさえる場合もある)で、スツールとセットになった近代的な安楽椅子である。余談になるが、スーパーマリオネーションのTV映画「サンダーバード」の基地であるトレーシーアイランドのフランク・ロイド・ライトを模した邸宅の中の椅子はこの椅子である。

椅子は最も「人間というスケール」の代理をする。舞台上に椅子が設置されて、その椅子の種類、質感、置き方、さらにその付帯小道具によって、そこにどのようなタイプのどのような考え方もつ人が座るのかを暗示させるばかりか、舞台上のスケール感を一気にまとめ上げることができる。

体長35cmのミーアキャットにとっては、高さ40cm前後の座面は格好の展望台だ。そこから最大のアレクサンドラ・トリバネアゲハ(羽の開張は30cm弱、ヴァイオリン長さの約半分)や4mにも及ぶ最大淡水魚であるビラルクを眺めることができる。ところでミーアキャットの体長と同じ幅の長いテーブルは、東京の下町の古い居酒屋にある対面型の客用テーブルにもよく使用されている。この狭小な幅のテーブルをはさんで他人同士が過密な状況で酒を飲み肴をつつく。日本雷鳥(全長36cm)やボーリングのピン(高さ38cm)より短いスペースが、一人宴会の縄張りとなる。

意外かもしれないが、高さ90cm、直径57cmの200リットルドラム缶も、別の意味で「人間というスケール」の代理機能をもっている。ワイルドクルーズや工事現場では、簡易な風呂やバリケード、貴重な備蓄庫、ときには棺にすらなる脇役だ。ミースの椅子とはある意味対極の、そしてある意味通底する野蛮でザッハリッヒ(即物的)な実用品なのである。最も高貴な趣味は、洗練と野蛮の振幅を横断するものでもあるのだ。



- 1 ガンダム
- 2 都電
- 3 グエル公園人工地盤大広場
- 4 五箇山合掌造り岩瀬家
- 5 飯島神社海上鳥居
- 6 アインシュタイン塔
- 7 ロッキード F104 (スターファイター)
- 8 コルビュジェの小さな家
- 9 カルカロドン・メガロドン
- 10 グ・ヴィンチ「最後の晩餐」
- 11 テアトロ・オリンピコ
- 12 H2 ロケット

10m

19 10m 後半の標本箱

Specimen case of the second half of 10m range

10m 後半というスケールは、身体で直接的に感じることのできる極大寸法である。大人の身長約10倍でもあるこの寸法を超えるや、人間は抽象的さらには記号的な感覚で巨大さを捉え始める。

世界に多く存在する演劇の舞台が、実はこの10m後半から20m前後の内法をもっていることは意外と知られていない。パリのオペラ・ガルニエは間口16.5m、奥行き12mであり、パラディオ設計のヴィチエンツァにあるテアトロ・オリンピコのそれはそれぞれ20m弱、6m弱(だまし絵の舞台セット最深部までは約18m)、また半戸外の清水寺の舞台は、それぞれ18m、10m程度

だ。ロンドンのシェークスピア劇場の舞台は10m×7.5mだが、十六角形の客席が囲む直径17mの平場アリーナの中にある。

つまり、10m 後半は「身体的表象世界の境界線」としての寸法なのだ。現実世界で結界を形成する神社の鳥居や中心性を高揚する仏塔などの高さもこの寸法であり、著名なヴァチカンのシステリーナ礼拝堂の天井高(20m)もこの範囲に入る。この極大寸法は、恐竜を含む畏怖対象生物の最大グループサイズであり、「身体的スケール」であるが故に、近接して見る者を圧倒する。ストラスブルの天文時計(直径18m)、最大モアイ像(高さ20m)

も同類サイズであることは象徴的だ。

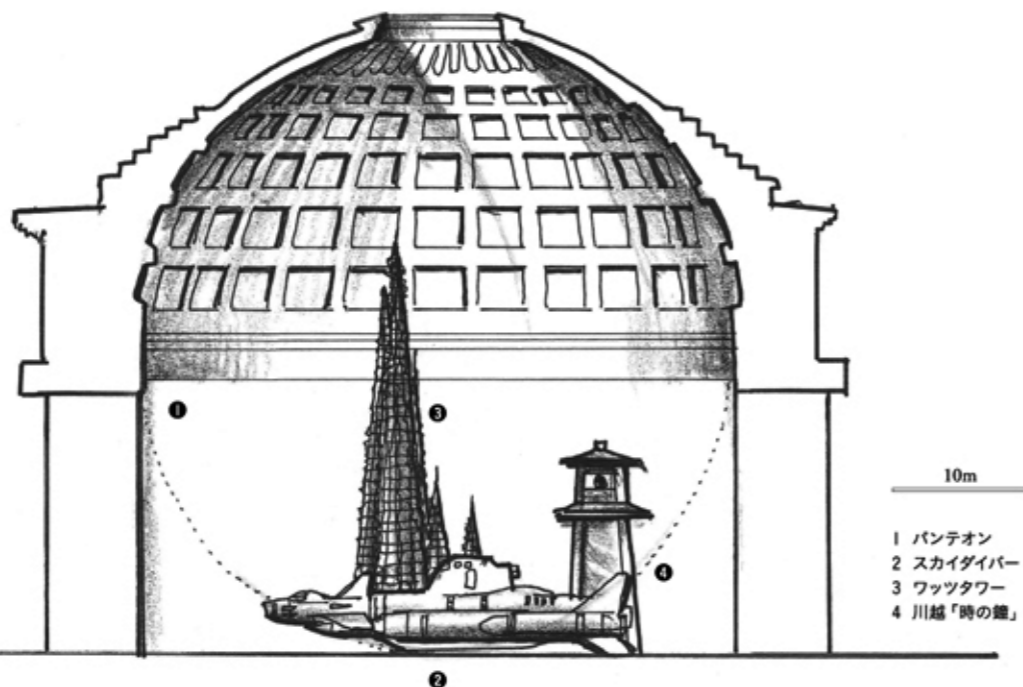
ジェット戦闘機がその最適スケールとして18m前後の長さに収斂していることも面白い。スターファイター(F104)は17.8m、トムキャット(F14)18.6m、イーグル(F15)19.5m、ラブター(F22)18.9m、ラーストチュカ(MIG29)17.3mであり、架空のガンダムや鉄人28号、超合金NZに換わる前のマジンガーZの身長も18mとこの身体的極大のスケール感が重要視されている。

しかし一方で、建物の高さとしての10m 後半は4~5階建てとして、最もわれわれに身近な「建物感覚」を

誘う寸法となる。機械や生物では畏怖対象のスケールが、「ビルディング」として対象を慣習的に認識するや極めて親密な感覚をもたらす。すなわち、眼そのものではなく、脳で見ているのだ。ちなみに長い間人々に愛され続けているパリのサンジェルマン・デ・プレ教会や札幌時計台は、いずれも19m台の建築であるし、ポツダム近郊にあるメンデルゾーン設計の愛らしいアインシュタイン塔(天文台)やウィーン市街にひっそりと建つ形而上的な雰囲気をもったヴィトゲンシュタイン邸は18mの高さである。

28 ドームの中の神秘

Mystery in the dome



ローマのパンテオン内部には、直径43mの球が内接する。それはドーム天井の半球直径そのものであり、最頂部の高さだ。赤道より下部は筒状のインテリアになる。その頂部には直径8.9mの円形の穴が穿たれ、天上から外光がさしこみ、ドーム内部にえも言われぬ光と影の模様をつくり出す。

今、この床には不思議なファブリック（意味や雰囲気を生産する物的要素——もともと18世紀絵画世界で使われた概念）が安置されている。川越の「時の鐘」は16mの高さをもつが、この高さ前後の宗教的装置は多い。厳島神社の海上鳥居の高さは同じく16m（軒の長さは24m）、室生寺五重塔の高さは16.2m、会津若松の栄螺堂（木造の二重螺旋斜路を直径6.3mの堂内にもつ奇構）は16.5m、石山寺の多宝塔の高さは17.2mである。

アメリカ国定歴史記念物にも指定されているサイモン・ロディアによるロサンゼルス「ワッツタワー」は、イタリア移民ロディアが1人で1921年から33年間でつくりあげたユニークな手づくりの鉄の群塔だ。全部で

14の塔があるが、その最も高いものは30mもある。

スカイダイバーはTVドラマ「謎の円盤UFO」に登場する人気の高い高性能迎撃潜水艦で、27.55mの長さ（野球の塁間距離=27.4mよりやや長い）、6人乗り。先端に外付けの超音速戦闘機スカイワンが着脱できるようになっている。なお、同じような飛行体を外付けではなく内蔵したものとしては、原潜出現前まで最大規模を誇った122mの長さをもつ伊400潜水艦（水上機「晴嵐」——長さ11.6m、幅12.3m、高さ4.6m——を内蔵）のように巨大化せざるを得ない。架空の「原潜シービュー号」（船首下に「フライングサブ」を内蔵）にしても、長さは124mほどの想定だ。

「時の鐘」「ワッツタワー」「スカイダイバー」がなぜ、パンテオン内部に同居しているのか、その理由はない。コラージュ効果が期待されているわけでもない。ただ、あらゆる類推と因果を逃れ始めたときに、「神秘」が訪れることは確認できる。

29 魔性と畏怖が共存する

Devilishness coexisting with sublime

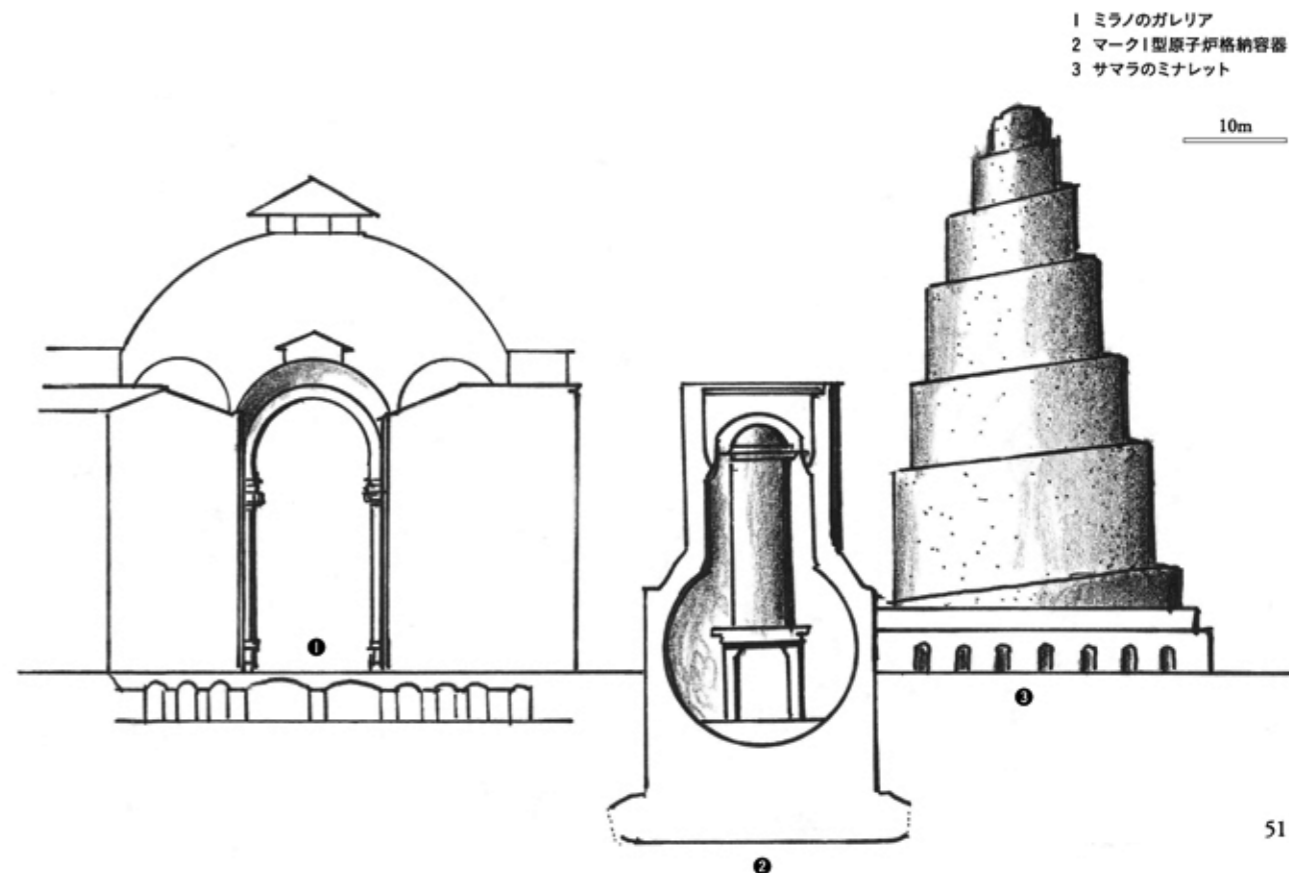
都市の街区を開削し、新しい都市動線を生む。その動線の両側には商店やショーウィンドーが立ち並び、天井には明るいガラスの屋根がかけられる。その天井はだいたい2階から4階分の高さをもつ。外界の道路からその動線に入る部分には立派なゲート装飾を施す。そしてその動線を遺す新しい都会人のライフスタイルが生まれる。19世紀に誕生したパサージュとは、そんな感じの公共回遊路であった。最古のパサージュは、ブリュッセルにあるサンテューベールのパサージュで、天井高さは18m、長さは200m強だ。

一方、ミラノにあるヴィクトル・エマニュエル二世のパサージュ（通常、ミラノのガレリアとも呼ぶ）は、天井高さが30mあり、パサージュ内観も古典様式の壁面、精巧な天井ガラスと鋳鉄細工の組み合わせ、床のモザイク模様、随所にしつらえられた豪華な彫像や装飾に囲まれた素晴らしい都市空間を形成している。幅員14m、190mと110mの長さの半戸外街路が、十字形に交差する。交差部の八角形部分は半径19mの円が内接する広さだ。その入口はミラノの象徴であるドゥオモ（高さ108m、

間口93m、奥行き158m）とその前広場に直結し、庶民的な場でありながら宮殿にも似た華麗な環境性をもった名所だ。スタインベルクをはじめ、多くの画家やイラストレーターは、このガレリアの風景を描き、都市の多様なコミュニケーションの楽しみを表現した。

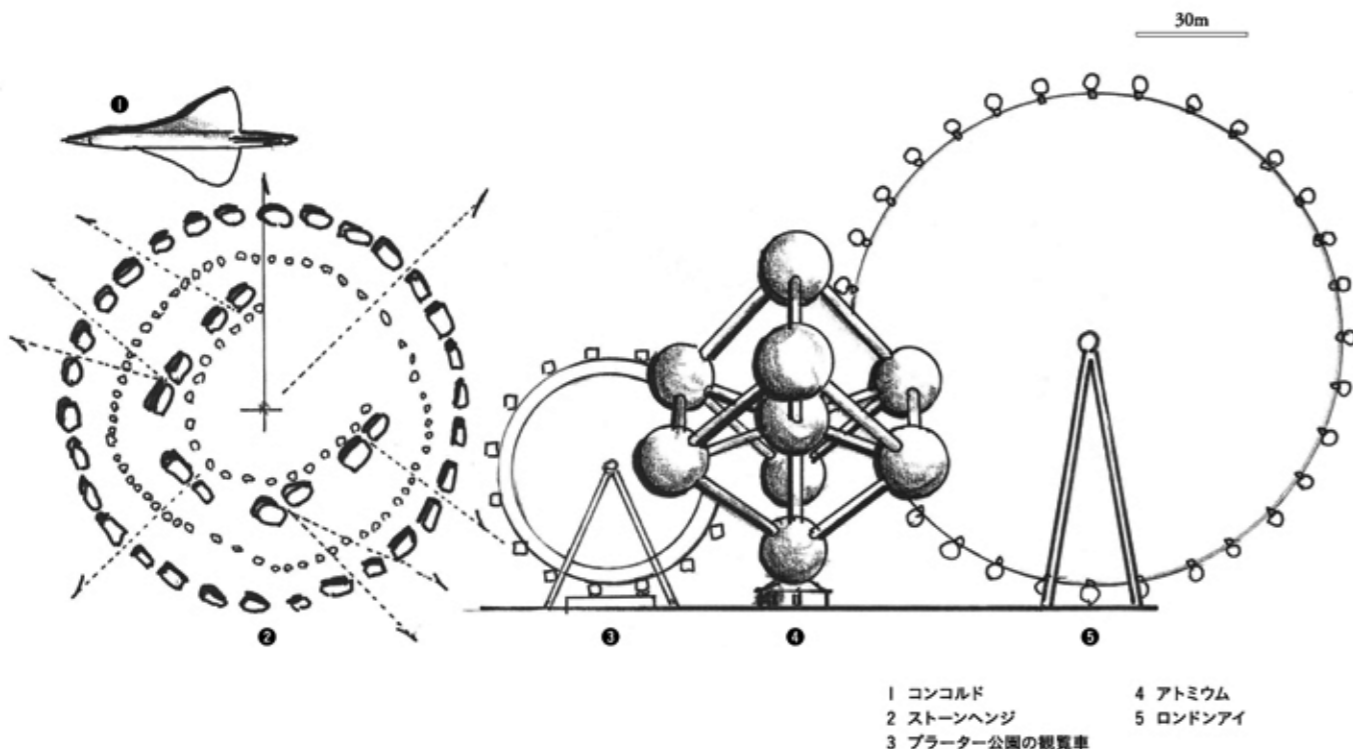
サマラのミナレットは、470m×400mの聖域緩衝帯の中で250m×170mの大モスクに付属し、「マルウィーヤのミナレット」とも呼ばれる。通路の幅が一定のアルキメデス螺旋の形状をしているが、バベルの形を最も残している塔だという意見も多い。高さ54mで、H2ロケットよりやや背の高い左巻きの螺旋塔だ。似たような環境にあるパーミヤンの石仏（タリバンによって一部破壊）の高さは55mである。こうしたスーパースケールは、崇高や畏怖という感興を人々に催させる。

福島第一原発でも使用されたマークI型原子炉は、日常的には不可視だが、実際、これらの建築物と同等のスケールをもっている（高さ33m）。この神の火が燃える人智を超えた装置にも、同質の魔性を感じさせずにはおかない。



38 円環は宇宙とつながる近道か？

Are any circles the shortcut becoming linked to the universe?



ジャイプールのサムラット・ヤントラやピラミッド、さらにはメキシコ、チチエン・イツァ遺跡の「カラコル」が天体観測器であったように、ソールズベリーにある直径100mの環状列石ストーンヘンジも宇宙と時間を計る石の測量儀である。円形の広場であるパースのロイヤルサーカスと同じ直径になるが、ストーンヘンジの場合には、外側の列石の内部にも石柱が配置された精緻な構造になっているから、長さ61.7m、翼幅25.6mのコンコルドは入ることができない。猛禽のようなこの超音速機の離陸には、3400mの滑走路がある（着陸は2200m）。

円形といえば、土木技師ゲイル・フェリスが発明した観覧車（フェリスウィール）がすぐ頭に浮かぶ。1893年シカゴ万国博覧会で初登場したものは、直径75m、60人乗りのゴンドラが36個連なったものである。シカゴ博のものは、エッフェル塔に匹敵する新しい大規模工学構造を訴求することが目論見だった。

それ以降観覧車建設技術は徐々に発展してきた。直径100mのものは、1989年横浜みなとみらい博で現れた。

現在最も大きなものは、直径150m、高さ170mの「シンガポールフライヤー」である。ストーンヘンジと並んだ観覧車は、小さい円環が直径65mのウィーン、プラター公園の大観覧車、大きいものが川幅約250mあるテムズ川河畔の新しいランドマークにもなっている高さ135mの「ロンドンアイ」である。前者の公園はオーソン・ウェルズの「第三の男」だけでなく、多くの映画の舞台ともなっていることでも有名だ。

その間に建つのは、1958年ブリュッセル万国博覧会のテーマ館でもある「アトミウム」で、102mの高さをもつ（現存）。すこぶる目立つ形態は、もちろん、原子モデルを形象化したものである。球体をつなぐコネクタ一部分にはエスカレータが内蔵されている。極大宇宙に応答する円形のストーンヘンジと、極小世界（これもまたひとつの宇宙だ）を形象化するアトミウムがここに出会う。観覧車の無窮動性も、言うまでもなく円環によって可能になる宇宙的属性だ。とすれば、円環には宇宙へのゲートウェイの力が宿っているのだろうか。

バルク黙示録（旧約聖書偽典のひとつ）によれば、バベルの塔の高さは468ペーキュス、すなわち1ペーキュス=47cm強換算で、約220mになる。モスクワ大学の尖塔や東京都庁舎が240m台であることからすれば、現代においては50階建てビルに相当する比較的日常的な高さだが、それが記された時期からすれば驚異的な高さを誇っている。一方、バビロンの城壁の高さは90m程度と推定されている。城壁の厚みは、何と24m近くあった。

これらの常軌を逸した建造物に比べると、七不思議のひとつであるアレクサンドリアの大灯台（高さ134m）は、横浜マリンタワー（高さ106m）の3割増し程度で合理的な垂直スケールだと言える。大灯台に近いスケールは、雪洞を模した京都タワー（高さ131m）であろうが、こちらはタワー部100mが無鉄骨という見えない驚異を誇っている（下層の建物は百尺=31m）。

灯台は光を周囲に投げかけるが、視線を投げかけるいわゆるパノラマ展望塔で、1400年に焼失した京都相国寺の七重塔（109m、史上最も高い日本様式の仏塔、昭和4年までその記録は破られなかった）などもこの部類に属する。有名な都のパノラマである洛中洛外図は、この視点からの等角図法によって描かれた俯瞰図にほかならない。

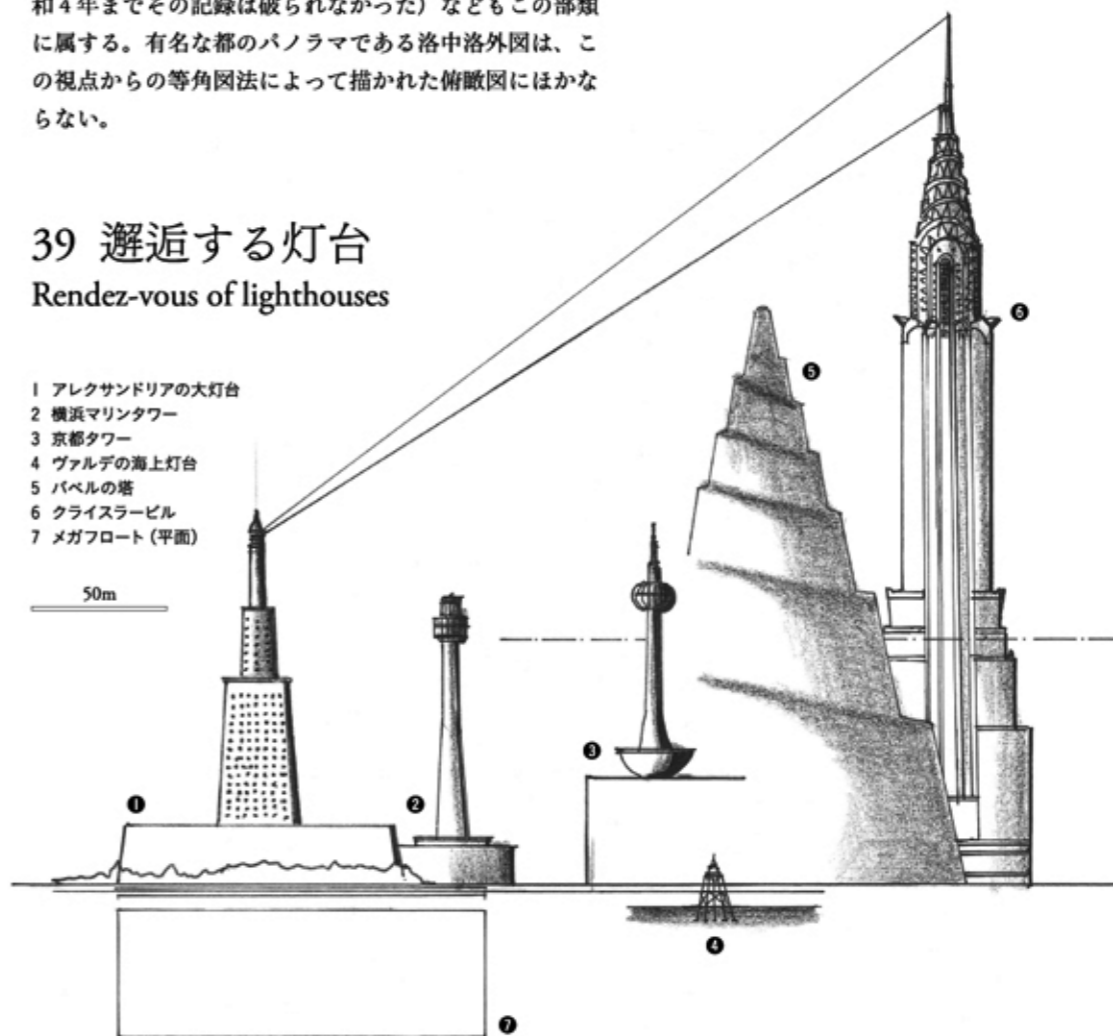
大都市の灯台がそうであるように、100mを前後する塔は都市のシンボル構造物ともなる。

ローマのサンピエトロ寺院（133m）、フィレンツェの大会堂（100m）、ロンドンのビッグベン（97m）及びセントポール大聖堂（111m）、ミャンマーのシュエダゴンパゴダ（99m）、シエナカンポ広場のマンジアの塔（95m）、ストックホルム市庁舎塔（108m）、サンクトペテルスブルクのイサク大聖堂（101m）、ニューヨークの自由の女神像（93m）などは好例だ。サグラダファミリア大聖堂の未完の中心塔（170m）も実は灯台の機能をもつものとして考案されていたし、ケルン大聖堂の双塔（157m）はいわば「音の灯台」のようなものであった。

ちなみに、グリフィスによる映画「イントレランス」（1916年）の白象が立ち並ぶバビロンのセットの高さは100m、その奥行きは実に1500mにも及ぶとした常軌を逸したものであった。ケネス・アンガーの『ハリウッド・バビロン』は、これをネタにハリウッドに蔓延する放蕩癖とデカダンスを描いたものであったことはよく知られている。

39 邂逅する灯台 Rendez-vous of lighthouses

- 1 アレクサンドリアの大灯台
- 2 横浜マリンタワー
- 3 京都タワー
- 4 ヴァルデの海上灯台
- 5 バベルの塔
- 6 クライスラービル
- 7 メガフロート（平面）



54 地形と競演する煙突 Chimney competing geographical feature

地形のスケールと比べればどんな巨大な塊をもつ構築物も微細なものになってしまう。この地形と競演できるものがあるとすれば、恐ろしく長い構築物、たとえば、万里の長城（長さに関しては諸説があり、現存は2400kmとか、推定総延長では6000kmとかあるが、とりあえず中国国家文物局の公式見解では8550kmである）、あるいはもっと小規模ではあるが、クリストが北カリフォルニアで仮想的に造営した「ランニングフェンス」(40km) などが、針を刺したような煙突構築物などで、逆にその存在感を示せることが多い。

世界一の高さをもつと言われるカザフスタンのエキバストス第二発電所の堂々たる煙突は実に420m（第一発電所の煙突は、高さ330m）あり、これはリオのパン・デ・アスカールの岩山や英国管轄のジブラルタルの岩山と並んでも遜色がない。煙突の煙をはく姿は、大地の呼吸器を想像させる。

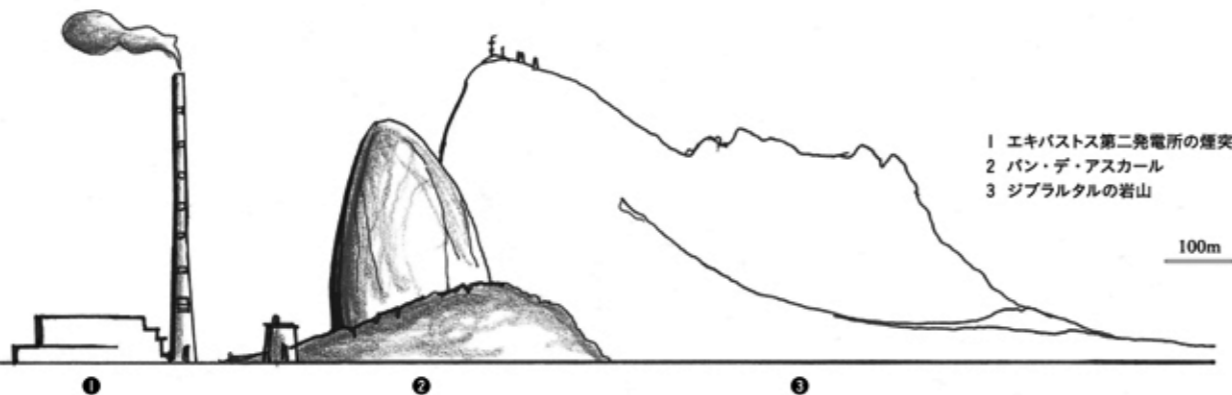
大雄院とも呼ばれた日立鉱山の煙突（1993年に自壊、156m）も、周囲の八角煙突やダルマ煙突とともに、鉱山の野性的なランドスケープに独特な印象を与えている。壊された千住の「おぼけ煙突」（4本、高さ83.5m）も、

高層ビルのなかった時代の東京下町の風景に刺激的な躍動感をもたらした。かつてドイツ新古典主義の建築家カール・フリードリヒ・シンケルが、煙突を近代社会のオペリスクと標榜して憚らなかつた話を想い起こす。

現在、最も高い煙突として近未来的に構想されているものは、800mの高さをもつアリゾナのソーラーチムニーで、頂部の集熱機構によって生まれた上昇気流を活用して、クリーンな発電を行おうとするものである。何とH2ロケット15機垂直に重ねた高さだ。

岩山では、オーストラリアのウルル（高さ348m）、パン・デ・アスカールと並ぶリオの奇観コルコバードの岩山（710m、頂部に両腕を広げた珍しいキリスト像が設置されている——像は高さ30m、左右30m、9.5mの台座にのる）、さらにギリシャのメテオラ（616m、しかも頂部に修道院がつくられている！）などがいわゆる景観岩だ。

考えてみれば、煙突は「地」や「水」とともに世界を構成する「（空）気」や「火」とも親和的な実体だから、人工と自然という枠組を超越した地平で、地形と拮抗するのだろう。



1 エキバストス第二発電所の煙突
2 パン・デ・アスカール
3 ジブラルタルの岩山

塔を並べて描く絵は数多く見かける。「高さ」が挑戦と技術的先進性を代理して顕在化するためだ。いわゆる「高さ比べ」である。エッフェル塔（324m）、上海東方明珠電視塔（468m）、東京スカイツリー（634m）が建っている。本来は、アメリカ塔（307m、1876年フィラデルフィア博のシンボルタワー）、東京タワー（333m）、モスクワのオスタンキノタワー（537m）、トロントのCNタワー（553m）、広州のTV塔（610m）、それに超高層のドバイのブルジュ・ハリファビル（828m）なども入れるべきなのだろうが、単なる数字の高さ比べではない景観がほしい。だからウラジーミル・タトリン構想の「第三インターナショナル記念塔」（高さ約400m）などが入っている。優雅なエッフェル、異形の明珠、木訥なツリーに、コズミックな狂気インターが加わる。

近くでは花火が打ち上げられている。中央が尺玉と言われる10号（直径29.5cmの玉）で、到達高度は330m、開花直径は320mだ。到達高度というのは、開花下限の

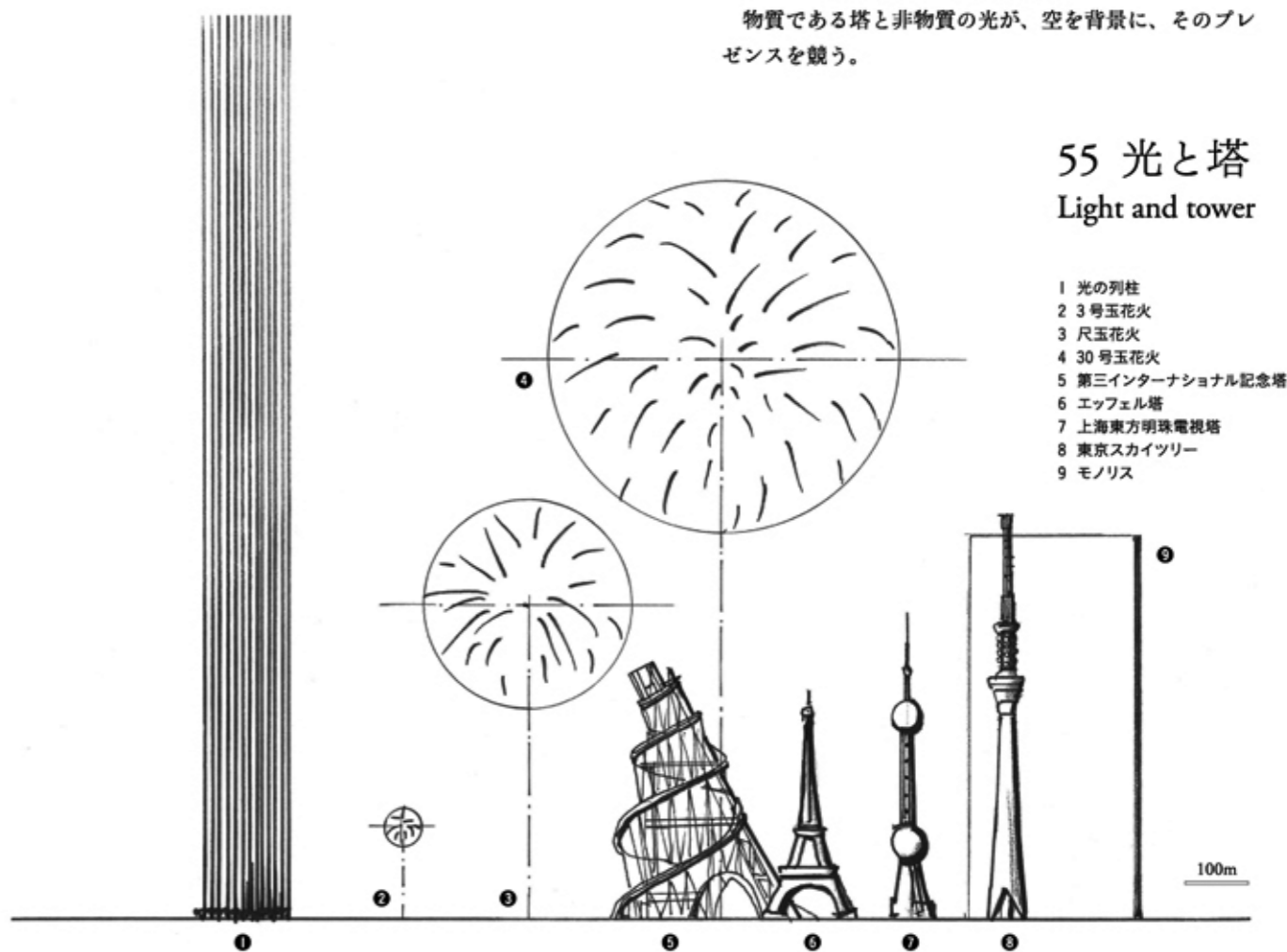
位置を示す。左は可愛い3号玉で、高度120m、開花直径60m、しかし右の30号玉花火になると、高度600m、開花直径550mに達する大物である。

第三インターナショナル記念塔がコズミックな点は、そのスパイラルの斜行軸が地軸に合わせてある、すなわち北極星を射る構えを見せていることである。純粋言語の構成主義は、古代の想像力と同居し始めたと言わなければならない。コズミックということで、小説版『2001年宇宙の旅』の長さ600mのモノリス（映画版ではせいぜい3~5mくらい）も置かれた。モノリスの寸法は、高さ：横：厚み=9：4：1の相互に割り切れない数字になる。

ところで、これらよりはるかに高く光束を空へ向けているのは、1937年9月11日20時ニュルンベルクで催されたナチの祭典の高射砲用サーチライトによる光演出である。舞台であるツェッペリンフェルト周囲に、8000mの高さの「光の列柱」が突如つくられた、というものだ。この世紀のスペクタクルはレニ・リーフェンシュタールの映像で見ることができる。

物質である塔と非物質の光が、空を背景に、そのプレゼンスを競う。

55 光と塔 Light and tower



1 光の列柱
2 3号玉花火
3 尺玉花火
4 30号玉花火
5 第三インターナショナル記念塔
6 エッフェル塔
7 上海東方明珠電視塔
8 東京スカイツリー
9 モノリス